魅せる！現場　～ダム管理の現場を支える人々編～

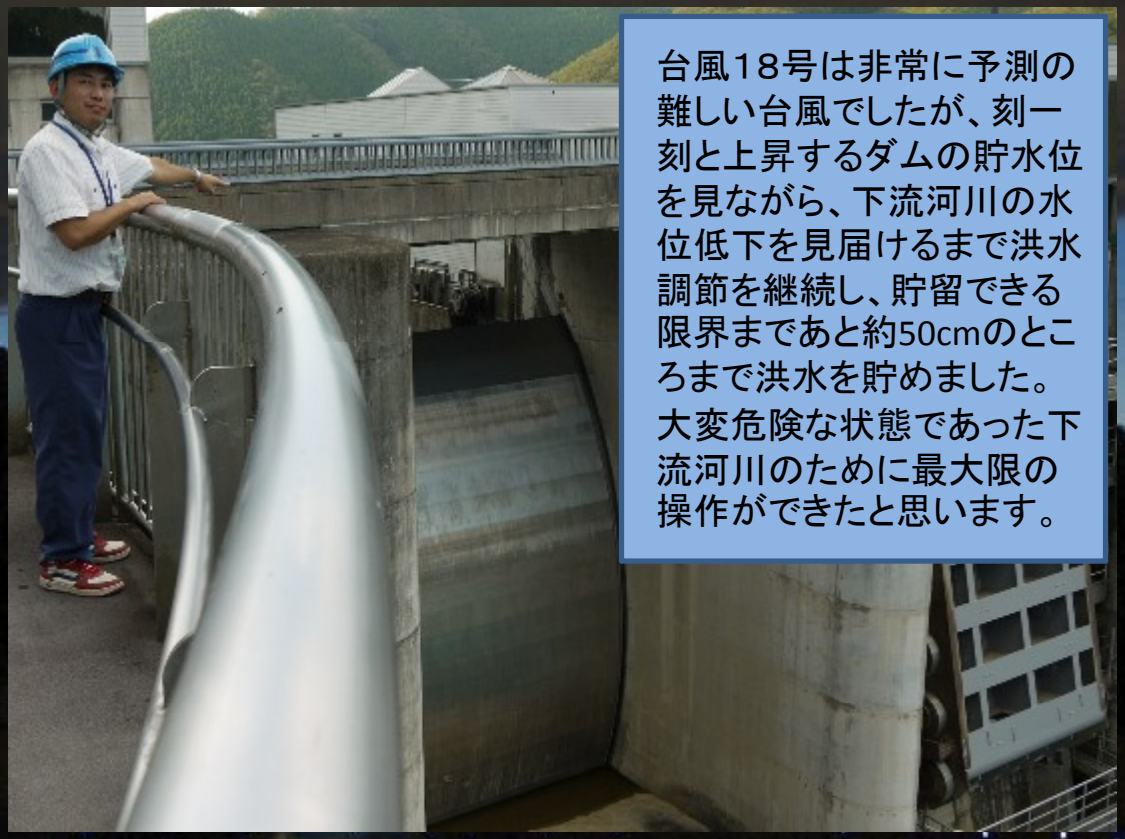
平成25年9月16日　日吉ダムは京都の街を最悪の事態から守った。

昨年の台風18号の時は、テレビで嵐山の映像が映され、下流の桂川で堤防を越水しているという情報も入り緊迫した状態でした。

日吉ダム管理所
主幹　渡部 信太郎

日吉ダムの操作がなければ必死の水防活動もできず、
堤防が決壊し壊滅的な被害が発生したと推定される。

24時間態勢でダムのゲートを操作した。
計画を越えて貯留し、さらなる貯留に、時間との勝負、洪水との勝負であった。



台風18号は非常に予測の難しい台風でしたが、刻一刻と上昇するダムの貯水位を見ながら、下流河川の水位低下を見届けるまで洪水調節を継続し、貯留できる限界まであと約50cmのところまで洪水を貯めました。
大変危険な状態であった下流河川のために最大限の操作ができたと思います。

最大限貯留した日吉ダム

9月15日（日）7：30　注意態勢発令
台風の接近に備え、放流前点検や、下流巡視、放流警報操作、通知連絡、予測、ゲート操作等に必要な要員が集合、点検を開始。

9月15日（日）22：34 洪水の貯留開始（防災操作）

9月16日（月）5：05　大雨特別警報発表

9月16日（月）6：00　非常態勢発令

6：00頃から自治体、消防、警察、マスコミ、一般住民等から問い合わせが殺到、「ダムが放流しているから浸水している」と誤解に基づく苦情も多かった。

問い合わせ対応に追われながらも、ダムの流入量予測やゲート操作、関係者への情報提供や通知、警報、河川巡視などを全員で休む間もなく繰り返した。

9月16日（月）11：25　洪水時最高水位に達したが下流河川のために洪水調節を継続。

9月16日（月）12：00　下流の水位低下を確認し異常洪水時防災操作（放流量増大）を開始。

最初は誤解して怒っておられた方も、丁寧に説明して「よく頑張ってくれている。」とご理解頂いたときはうれしかったですね。

愛される日吉ダムへ
そして伝えたいこと

地域のために洪水や渇水に備え、日々万全を期していることをお伝えしたいですし、多くの人々の協力によって造られた日吉ダムですから、大切な財産として皆さんに末永く愛されるとともに、こんなにも地域のために役立っているということを、本当に多くの人に知って欲しいと思います。

所長代理　横井孝誠

日吉ダムのダム湖及び周辺には年間約50万人の人々が訪れる。
昨年も、日吉ダムマラソンや子供の魚つかみ大会など数多くのイベントが行われた。
そして、8月には天若湖アートプロジェクトとして、湖底に沈んだ家々を偲ぶために、湖面に浮かべた約120個のLEDライトで往時の灯りが再現される。
日吉ダムの建設に協力して頂いた方々に感謝するとともに、地域の大切な財産である日吉ダムが、さらに地域に役立つよう意を新たにする時でもある。